仮面ライダートランスD

rubixcube

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダートランスＤ

【Ｎコード】

Ｎ０１７６Ｊ

【作者名】

ｒｕｂｉｘｃｕｂｅ

【あらすじ】

この小説は、仮面ライダートランスの話が最終話を迎えた後の時間軸のお話。粋は詩織と結婚し、二人で社長となり、雨宮グループを経営していた。しかし、その裏ではそんな二人を支えるため、ある男が奮戦している。あいつがトランスでこいつはトランスじゃない。しかもライカルがライカルじゃなくなる。トランスは地上に降り立った黒き悪魔となり、ライカルは守護者となる。トランス未来系外伝、ここにあり。

（前書き）

あらすじにも書いたとおり、この話は仮面ライダートランスの未来の時間軸の話であり、トランスに変身するのは粋ではありません。それでも良いならどうぞ。因みにこの話は短編小説でこの話限りです。続きが欲しい方は、感想ください。人数によっては新しく連載小説で続きをかきたいと思います。

皆さんは、雨宮グループという巨大株式会社をご存知だろうか？訳合って、現在はこの国を裏側から牛耳る程の財力と権力を保有する、国際的に有名なグループだ。おっと、失礼。俺の名前は、修羅絆塗（しゅらはんと）。『阿修羅が絆を塗り潰す』と覚えてくれ。大層な名前だとは思うだろうが、是は偽名だ。しかしながら、本名は誰も知らない。勿論俺もだ。この偽名を名付けたのは、俺のマスター。後々紹介しよう。

俺が勤めるのは、前述の通り、雨宮グループ。その本社だ。そして部署は『特務経理部』。表向きは経理部補佐と言うつまらない物。だが、実体は社長直属、特認命令執行部という長い名前の部署。この部署に勤めるのは、俺たった一人。収入は良いし、仕事は時々なので、基本的に一日中部屋に篭って、会社のコンピュータで遊んでる。同僚と呼べる存在はいない。入社試験も受けずに入社したからな。

さて、俺の仕事の内容だが、端的に言って、『殺し』『強奪』など常人には恐ろしいものばかり。まぁ、俺にとっては何ともないが。慣れれば、なんとも無いぞ？

俺の部の部屋、一人に割り当てられるには広すぎる部屋の卓上電話が鳴る。この部に電話をかけるのはただ一人。

「直ぐに行きます。」

「ああ。そうしてくれ。」

会話内容はいつもこんな程度。因みに、最初が俺、次が俺の上司だ。部屋を出て、エレベーターに乗る。目指すは最上階。俺の部屋が最

上階近くにあるので、そんなに時間は掛からない。奥まった所にある『社長室』と書かれたドアを叩く。

「社長、修羅です。失礼します。」

「入ってくれ。」

この雨宮グループ、社長が二人いる。しかも夫婦だそうだ。なんでも、今目の前に居る俺のボス、雨宮粋（あまみや すい）の若い頃、当時の社長令嬢であった雨宮詩織（あまみや しおり）に一目惚れされ、逆玉だったそうだ。ラッキーボーイだと思う。で、社長令嬢がダダを捏ねて、俺のボスと共に新しく社長に就任したというわけだ。お分かりいただけただろうか？

「今回の指令は？」

ボスが顔を上げて、こちらを見る。雨宮粋、旧姓、形粋（かたち すい）。現雨宮グループの社長にして、この国の裏支配者。恐ろしいほどの肩書きだと思うが、目の前にしてみれば、まだ若く、３５歳の若社長だ。１５年ほど前、この国に事件が起きた。俺は当時まだ幼く、事件の被害が及ぶ範囲には住んでいなかったので良くは知らないが…。その事件とは、怪物の出現。キメラと呼ばれていたらしい。そして、それと戦っていたのが、この若社長。トランスと名乗っていた。

「ああ。先程、わが社に悪影響を出す会社がわざわざプレゼンを行いに来たんだ。被っていたんだよ、この雨宮グループと。」

「了解しました。何時にいたしましょう？」

「今夜だ。直ぐに片付けろ。」

「はい。」

俺はそのまま社長室を後にする。そして自分の部署に戻り、最近買

ったポータブルゲームで遊び始めた。出勤時間と退社時刻はしっかりと守る。残業はあるが、それが本来の仕事の様な物だ。

やがて、退社時刻の５時３０分となる。俺は机の隣の金庫からアタッシュケースを取り出した。解除コードを入力し、その中に必要な物があるかどうかだけ確認。直ぐに蓋を閉めた。

「さぁ、帰るか。」

俺は地下駐車場へ脚を運ぶ。今日会社へ来る時は、高級外車を乗ってきた。金の使い道がそれくらいしかない。だが、社長から任務が与えられると、俺はその日はバイクに乗ることにしている。黒く塗られた大型のバイク。マシン・トランストーム。昔は鈍い金色に光っていたらしいが、今は面影も無い。俺としては是が好きだがな。バイクに跨り、エンジンをスタートさせる。やがて、モーターでの走行となり、音が静かになる。一旦家に帰り、腹ごしらえをする。それからが俺の仕事の始まりだ。

その夜、俺はある道路にいた。人気は無く、街頭も多くは無い。既に部屋のデータベースでターゲットの情報は検索済み。ほぼ１００％の確率で此処を通るのだ。

「さて、そろそろ準備でもするか…」

独り言を呟く。アタッシュケースを取り出し、開ける。中に入っていたのは、銀色のベルトと、黒く、白・赤・緑・金の線が入った携帯電話。ベルトを腰に巻き、携帯を構えた。

【Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ＴＲＡＮＳ？】

聞こえる電子音声。

「変身」

と二文字で答えた。すると、俺の体が変わっていく。黒いスーツに黒い装甲。金の縁取りが施された。仮面ライダートランス、トランスフォーム。昔は色が白かったと聞かされている。その上、是より黒を基調としたフォームがあることも聞かされた。だが、そんな事はどうでもいい。闇にまぎれるにはこの色の方がいい。

辺り一帯に光が差す。車が来た。データベースの記載情報通り、ナンバープレートに書かれた車両識別番号はターゲットの車だと確認させた。

「ライダーキック」

【Ｒｉｄｅｒ－Ｋｉｃｋ　Ｓｔａｒｔｉｎｇ】

先代のトランス、俺のボスの事だが、彼は武器に頼った戦法を得意としたらしい。ライダーキックはあまり無かったと聞いた。だからこそ俺は、トランスのシステムを悲しませない為に、全ての技を万遍なく使おう事を心がけていた。運転手（ターゲット）がヘッドライトで俺の姿に気づかない内に、暗闇の中にジャンプする。そして、一気に車のバンパーに必殺キックを繰り出した。

キックを受けて、凹むバンパー。俺は直ぐに跳び下がった。次の瞬間、爆発を起こすターゲットの車。ガソリンに引火したか何かしたのだろう。

「うぅ…」

運転席だった所から、人が出てくる。俺はターゲットに近づく。

「お困りのようだな？そこの人？」

ターゲットに話しかけると、そいつは顔を上げた。そして、恐怖の色を浮かべる。炎で俺の姿は良く見えるはずだ。

「俺を知ってるか？」

「仮面ライダートランス…？」

「おお、よく知ってるじゃん。」

「何故だ、キメラはもういないはず…」

「そう見ただが、再びクウガモドキは降臨したのさ。黒く染まった堕天使、いや、悪魔としてな。それじゃ、さようなら。」

「拳銃に頼るんだっ…」

ターゲットの襟首を掴んで、持ち上げる。そして、胸を殴った。勿論そいつは即死。最後に何かを言っていたが、気にするものか。

「人間って、脆いねぇ…。」

動かなくなったそいつを、俺は元の車に押し込めた。

「さて、もう一仕事。」

俺は携帯電話型変身ツール、トランスフォンを開き、金色のボタンを押した。左手甲に円形の物体が出現する。俺はそれで自分の腕を擦った。

【Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｊｕｒａｓｓｉｃ－Ｆｏｒｍ】

俺が乗ってきたバイクが浮かび上がる。そして、形を変えて、俺に取り付いた。パワー重視のジュラシックフォームである。昔はバイクと同じ金色だったが、今は塗装され、黒い。

「そらよっと！」

車を後ろから思いっきり押して、電柱にぶつけた。フロントガラス

が粉々になり、車内では既に死んだターゲットが跳ね回っている。

「任務完了。変身解除」

【Ｔｒａｎｓ－ｏｕｔ】

バイクは元の形に戻り、俺を包んでいた装甲は消え去る。トランスとして、雨宮財閥の不利益となる存在を消す。是が俺、修羅絆塗の仕事だ。芽は早い内に摘む。雨宮社長のモットーらしい。

「あっ、一つ言い忘れてた。…『完膚なきまで殺るからよろしくな』。」

俺はそう言い残すと、警察が来ない内に現場を後にした。まぁ、ばれたとしても、ボスが何とかする。それだけだ。

次の日、俺は報告のため、再び社長室に赴いた。

「で？任務は？」

「滞りなく完了。」

「よくやった。気になる点は？」

「特に。ですが、『拳銃』がどうのこうの最後に言っていました。」

「拳銃…、まさか…。」

「ボス、どうかしましたか？」

「いや、なんでもない。気にしなくてもいいだろう。それより、今晩もまた仕事だ。用意はしておいてくれ。」

「了解。」

俺は引き下がる。社長室を出る際、海外視察に行っていた、もう一人の社長と出くわす。

「雨宮社長。お久しぶりです。海外の方はいかがでしたか？」

「あぁ、修羅君。ええ、まあまあの出来ね。君も粋の命令、ご苦労様。」

「ありがとうございます。では、失礼します。」

ドアを閉める。そのドアの向こう側から、『す～い！！』とか言う声が聞こえているが、気には留めない。昔からああらしい。因みに、雨宮社長は、ボスの俺への命令が殺人などとは知らない。全てボスが雨宮グループの為を思ってやってるらしい。ライダーシステム・トランスと、この俺、修羅絆塗を使って。

その夜、俺は再び変身して、ターゲットを待っていた。今回は重役。メインの命令は重要書類の奪取。もしくは燃やせとのことだった。書類の内容は知らないが、ボスの命令には従う。ただそれだけだ。

…来たようだ。

「ライダーキック」

【Ｒｉｄｅｒ－Ｋｉｃｋ　Ｓｔａｒｔｉｎｇ】

走ってくるリムジンに、何時ものごとくキックを浴びせる。しかし、そのときだった。

【Ｄｏｕｂｌｅ－Ｍａｇｕｎｕｍ　ｒｅｌｅａｓｅ－ｇｏ】
聞いたことの無い電子音。次の瞬間、俺は無数のエネルギー弾に撃たれていた。

「がっ！」
ライダーキックは失敗。俺は地面に落下する。その間に車は通り過ぎてしまう。

「くそっ、ターゲットが…。」
追おうと、バイクに走る。しかし、再び足元に火花が散った。

「誰だ！」
その声に答えるかのように、誰かが月明かりの下に出てくる。

「その姿…」

「始めまして、かな？トランス。だけど、この二つのライダーシステムが会うのは初めてじゃないんだなあ。」

「何が言いたい？」
きっと俺を撃っただろう奴に問う。そいつは、全体的にメカニカルな感じで、両腰にホルダーを下げている。その中の銃で俺を狙ったに違いない…。

「つまり、君のライダーシステム、トランスと、この僕のシステム、ライカルは元々味方同士だったんだ。」
ライカルと名乗る、もう一人のライダー。

「時代の流れかなぁ？この二つのライダーシステムが、敵同士にな

るなんて。ま、今となってはどうでもいいけど。死んでもらうよ、トランス。」
再び銃を向けるライカル。今の俺は丸腰。勝ち目はほとんど無い。
「それがあったな…。ボスはお勧めしないと言ってた奴が。」
【Ｅｖｏｌｕｔｉｏｎ　Ｌｉｖｉａ－Ｆｏｒｍ】
全身が鱗のような装甲に覆われ、その姿をリヴァイアフォームに変える。ただ、全身は黒かった。
「ちょっと厄介だな…。」
そう言いながら、ライカルは銃弾を放ってくる。だが、ただやられる俺じゃない。
「はぁっ！」
右手を掲げ、力を込める。すると、銃弾は軌道修正。１８０度向きを変えて、ライカルに突っ込んだ。
「ぐぁぁぁぁ…」
「はっ、自分の攻撃受けてちゃ、意味がねぇな。」
「ふっ、僕の今回の依頼は依頼人を暗殺者から守ること。まさかその暗殺者がトランスだとはね…。トランスもとうとう雨宮の犬か…。」
「煩い。」
ボスほどではないが、俺にも一応雨宮グループへの恩が有り。今の仕事に満足していた。
「今日は引き下がろう。どうやら君とは敵対する立場のようだ。い

ずれまた会うだろうね。」
そう言って、自分のバイクに跨り、去っていった。
「ちっ、取り逃がした…。始末書物だぜ。」

（後書き）

どうだったでしょうか？トランスは黒い悪魔の殺人鬼になりました。しかもライカルが敵です。クリーツはどうなったのか？まぁ、これ以上になると、本編のネタバレになるのですが…。感想お待ちしてます。あっ、因みに、トランスＤのＤは「ＤＡＲＫ」を意味します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0176j/

仮面ライダートランスD

2010年10月21日23時33分発行